
【蛙とアルミニウムスピンオフ】真紅の竜

竜騎士そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【蛙とアルミニウムスピノフ】真紅の竜

【Nコード】

N9746L

【作者名】

竜騎士そらら

【あらすじ】

克蘭テルミットの隊長の誕生日が近くまで迫っていたある日、メンバーのひとりの発案で、隊長になにかプレゼントを送ることになった……………

この作品は、拙作、「蛙とアルミニウム」のスピノフ作品となっております。話を楽しむのに必要な知識として、蛙とアルミニウム本編の第74、75話の間の「幕間」まで読んでいることを推奨します。

エノケン：そういえば、もうすぐ隊長の誕生日よね？

六月に入って少し経った、そんなある日の深夜。オンラインゲームのクラン、テルミット隊のチャットルームで、ふとそんな話題があがった。

隊長はすでにログアウトしてそれ以外のメンバー6人が全員揃っている。明らかに、言うタイミングを計っている。当然のことといえはそうなのだが。

そういえばそうだった。すっかり忘れていた。竜牙というハンドルネームを持つ男は、そのことに苦笑をしながらキーボードを叩いた。

竜牙：そうだったか。だが、それがどうかしたか？

エノケン：祝っちゃダメ？

竜牙：いや、でも、今までは誰かの誕生日来てもなにもなかっただろ
packer：でも、隊長さんですよ？

なんなんだ。これじゃあ、こっちが責められてるみたいじゃないか。

竜牙：いや、別に祝うのは構わないが、なにかするつもりなのか？

啓蒙者：普通に、プレゼント

啓蒙者：を送ったりするとか？

エノケン：そうそう。そんな漢字

エノケン：ごめん。感じ、ね

Coco：プレゼントってゲーム上でってこと？

packer：プレゼントって、ここのアイテムをあげるんですか？
ふたりが同時に同じ内容のことを書いた。

トビ丸：おまえら結婚しちゃえw > パツカ、ココ

Coco：喜んで！

packer：遠慮します

竜牙：それで、プレゼントか

エノケン：そ。まあ、なんか送るの。なににするかは、それぞれの判断に任せます！ ネタに走るのもok！ じゃあそういうことで！ あ、私はアイテムじゃなくて、隊長と副隊長のエロエロなBL書きますのでw

竜牙：おい！ やめろ！

<エノケンさんがログアウトしました

トビ丸：www

竜牙：逃げたかつ！ 本気で言ってるんじゃないよな？

Coco：うーん、明日直接訊いてみるw

竜牙：頼むぞ……

結局その場はそれでお開きとなった。さて、なにをあげるべきか？ 例えば、レアアイテムを渡したとして彼はあまり喜ばないだろう。隊長はコレクターではないし、なにより、とんでもないレアアイテムを持っているのだ。

クリムゾンクリーエ。このゲームの原作の主人公が乗るドラゴン、クリーエ種の突然変異版。真紅の竜。

以前開かれたゲーム上の大会イベントでの優勝賞品だ。隊長はそれに見事優勝して、他の誰も持っていないドラゴンを手に入れた。これを凌ぐレアアイテムなんて、存在するのだろうか？

「どうするかな……………」

電源の落ちた、真つ暗なディスプレイの前で黙考すること数分、不意にひらめいた。

なんとなく趣旨から外れる気もするが、これでかまわない、そんな気がした。なにより、これは自分の望んでいることだ。

翌日、竜牙は強い日差しの照りつける砂漠の上を、愛用の竜に乗って飛んでいた。お目当てのアイテムを手に入れるためには、このミッションをクリアしなければならない。他に仲間はいない。ひとりであるには少しきついミッションだが、この際仕方ない。

不意に目の前の砂の海が盛り上がり、巨大な影が現れた。すかさずそこにアサストライフルを撃ちこむ。全弾命中。しかし相手は微動だにしない。

被っていた砂が流れ、その姿があらわになった。竜牙のドラゴンよりも、五、六倍は大きいトカゲ。その体表は、赤、黄、黄緑と、毒々しい色の鱗におおわれていて、あちこちからトゲが生えている。これを倒すのがミッションの目的だ。

「さすがに強いか！」

巨大トカゲがこちらを見つめている。まだこちらに攻撃してくる気配はない。今のうちに少しでもダメージを与えておきたい。アサルトライフルのマガジンを換え、さらに撃つ。敵の動きは緩慢だから、当てるのは造作ない。しかし、堅い。ダメージを受けているうにはとても見えない。そういうものだとは知っているし、もちろんわずかながらも効いていることはわかっている。しかし、だからといって不安を全く感じないわけではない。

トカゲがゆっくりと口を開いた。反撃の合図。数秒後には吐き出された火炎がこちらに向かってくるだろう。竜牙はあわてず、その口に向かって手榴弾を投げた。寸分違わずトカゲの口に入りそこで爆発。ライフル弾よりはダメージ大きいだろう。が、殺すには至らない。むしろ、弱っているようにも見えない。

もともと、複数のドラゴンナイトでよってたかって攻撃するような趣旨のミッションだ。ひとりで持てる銃弾も手榴弾も、数に限りがある。本当に倒せるのか、不安になってきた。

それでも目的のためにめげることなく、その後も単調な作業を繰

り返した。ようやく敵が弱りだしたと思った。同時に、弾薬と手榴弾が尽きた。

「くそ！」

悪態をつきつつ、武器を持ち替える。使用回数に制限のない槍。それを構え、トカゲに急接近。それを振り払おうとする奴の尻尾をかわし、背中に突き立てる。そして、そのまま動かずにじっとする。トカゲが尻尾を自分に向けて振るうのを確認して、すかさず離れる。愚かで鈍重なトカゲは、自分の背に尾のトゲを突き刺すことになった。

それが止めになったのか、トカゲは一度大きくのたうち、それから動かなくなった。ややあって、ミッションクリアを告げる表示が画面に映し出される。次いで、戦績表示。そして……………そのまま、ミッション選択画面にもどった。

おかしい。クリアすれば手に入るのではないのか？

wikiサイトで調べて、そして絶望した。一定時間内でクリアすれば入手。それは、さきほどかった時間の半分ほどだった。

「……………」

諦める気にはならなかった。すぐに自分の持っているすべてのアイテムとにらめっこし、時間短縮の策を練り始めた。

隊長の誕生日は、あつという間にやってきた。竜牙が「プレゼント」を入手したのはその前日だった。ギリギリセーフ、だがなんとか間に合った。

隊長にメッセージだけ送る。この後、ふたりきりになりたい、と。

その日のチャットログより抜粋

エノケン：みんなープレゼント送ったー？

啓蒙者：今送った

トビ丸：なに送った？　ちなみに俺はタキシード甲冑だw

竜牙：ネタ装備かよ！

C o C o : w w w

エノケン：まあまあ、そういうのは隊長のみぞ知る、ってのにしない？　その方が謎があっていいし

p a c k e r : そうですか？

エノケン：そうそう

竜牙：それはいいが……お前、まさか本当にBL書いたんじゃないだろうな

エノケン：大丈夫！　ちゃんとアイテム送ったよ！

＜あるみんなさんがログインしました

C o C o : おめでとー

竜牙：おめでとー

p a c k e r : こんばんは、誕生日おめでとーございます

啓蒙者：おめでとー

あるみんな：ありがと

エノケン：誕生日おめでとー

トビ丸：むしろ本当にBL小説渡してもあの隊長なら喜んでくれるかもなw>エノケン　おめでとー>「あの隊長」

あるみんな：あの隊長ってw　まあいいや。みんなありがとう。

あるみんな：プレゼントはありがたく受け取っておく　で、今日はなににする？

それからしばらくは、いつも通りだった。ミッションをいくつか

クリアして、他のクランに戦闘を挑んで圧勝したり。隊長の指揮は今日も冴えていた。そして、数時間後。他の全員がログアウトするまで待つのは、正直つらかった。空はすでに白み始めていた。小学生に徹夜させることに若干の罪悪感があったが、もともと週三回ぐらいは徹夜するような人だ。罪悪感など抱く方が失礼なのかもしれない。

今、二匹の竜が荒野を飛んでいる。放っておけば敵の出でこないステージ。

真紅の竜に乗る騎士が竜牙に話しかけてきた。

『どうしたんだ？ ふたりきり、なんて』

「プレゼントを渡して、この場で装備してほしくてな」

『？』

「ほら」

隊長にプレゼントを投げる。真紅の竜の騎士はそれを受け取って、

『なんだこれ？ 極光翼？』

「ドラゴンに装備するんだ」

『わかった』

隊長の竜は地上に降り立ち、しばらくじっとしていた。そして、鮮やかな真紅の翼が、その色合いを変えた。虹というか、あるいは装備の名の通りオーロラというか、全身が赤色の竜の翼だけが、七色の光を放ち始めた。

『おい竜牙、なんなんだこれは？』

「見ての通り、ドラゴンの羽を虹色に光らせるアイテム。装備中は旋回能力が跳ね上がるが、隠密能力はガタ落ちだな」

『俺には使えないじゃん。俺、隠れるのが仕事なのに』

確かにそうだ。この隊長は赤などと目立つことこの上ない色のドラゴンで隠密行動をするのを得意としている。しかし、さすがに光り輝く鎧をまとっての隠密行動は、ちょっと無理があるだろう。当然だ。これは、隊長のためのプレゼントではないのだから。

「なあ、ちょっとそれで飛んでくれないか？」

『え？ ああ、わかった』

隊長はその指示に従い、大空を舞い始めた。虹色の翼が、青いキヤンパスに軌跡を描く。竜牙はと言うと、その美しさにただただ見とれているだけ。そう。これが見たかったのだ。プレゼントなんて口実、きっかけに過ぎない。この竜の、最高に美しい姿を拝みたかっただけなのだ。

「なあ隊長……………」

『どうした？』

「俺がこのクランに入った理由って、知ってるか？ 今まで入ってたクランを抜け出してまで、お前の下にいる理由」

『いや。あんまり興味なかったし』

「だな……………ひとつは、前のクランに嫌気がさしたから。もうひとつは、隊長、お前に惚れたから」

「……………え？」

「一目見て、惚れたんだ。好きになったんだ。お前とずっと一緒にいたいって」

『……………』

隊長が真紅の竜を手に入れたあの日の大会、竜牙もそれに参加していた。目当ては当然、あの竜だ。クリムゾン・クーリエの画像を一目見た瞬間、雷に打たれたような感覚に襲われた。絶対に手に入れよう。絶対に優勝してやる。そう意気込んでいた。

その大会中に戦場で見かけたのが、「あるみん」なんていうかわいらしいハンドルの、ドラゴンも装備も初心者向けの、明らかにビギナーのドラゴンナイト。初心者も上級者も入り乱れてのイベント。ひよっ子をいきなり撃ち落とすのは少し心が痛むが、いずれにせよ敵だ。スコア稼がせてもらおうと銃の照準を合わせようとしてその瞬間に向こうから撃たれた。

敵の武器の威力が弱めだったために致命傷にはならなかった。すぐに反撃しようとした。しかし敵の姿は消えていて、周りを見渡した時にはもう遅かった。上方からこちらに向けて急降下してきた敵の槍が、まっすぐ竜牙の胸に刺さった。

初心者相手に完敗だった。さすがにいくらいにやられてしまった。その後、優勝したのがその初心者だと聞いて、妙に納得した。

真紅の竜に対する想いは変わらない。しかし、あの竜は真にふさわしい主を手に入れた。そう思えもした。そして、その姿をいつも近くで見たい。即日で所属していたクランを抜け出し、あるみに接触した。彼のほかにはもうひとり、小学生の女の子がいるだけの弱小クラン。クランへの加入はあっさり認められ、それが始まりだった。果たして竜牙の予想は的中し、隊長は今もって竜牙を惹きつけ続けるほどに真紅の竜の美しさを引き出していた。

『なあ竜牙……』

隊長が、なぜか少し遠慮気味に話しかけてきた。

「うん？ どうした？」

『惚れたってさ、やっぱBL的な意味で？』

「……はい？」

『えっとさ、エノケンからのプレゼントってのが、なんか小説でさ

……俺と竜牙のBLなんだ。18禁の』

今隊長なんて言った？

「それは、マジでか？」

『うん』

「あいつめ……やめろと言ったのに……」

『その様子じゃ、別に誘ってるわけでも、釣りでもなさそうだな』

「当然だ」

『だよなー』

「……………」

『……………』

一瞬の沈黙、そしてどちらともなく笑い声が起こった。いつも通り。尊敬する隊長殿だ。

「じゃあ隊長。とつとこのミッション終わらせて落ちるか。明日も学校だろ？」

『どうせ寝るけどな。えっと、どうすればクリアだったか……………』

そして応答を待たずにさっさと進んでしまう。虹色の羽がそのままなのは、気遣いなのか。

「はい、ずつついていきます隊長様」

向こうに聞こえないような小声で言っ、それを追いかける。そうとも、ずつと仕えてやるとも。真紅の竜とそのドラゴンナイトの下に。

（後書き）

こんにちは。ドラゴンナイトです。この作品を投稿した六月一四日は、拙作、蛙とアルミニウムの主人公、アルミの誕生日です。なので、このように記念小説を書きました。

竜牙が主人公のお話となっています。彼らネットゲ組は、好きなキヤラ達ではあるのですが、本編での出番が少ないためこういう形で出すことができて少しうれしいです。

では、これからも蛙とアルミニウムが皆さまに読んでいただけることを願いながら、あとがきを終わらせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9746/>

【蛙とアルミニウムスピンオフ】真紅の竜

2010年10月12日03時20分発行